

『新撰和歌六帖』における『古今和歌六帖』出典未 詳歌の受容と継承

福田, 智子
同志社大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4773214>

出版情報 : 語文研究. 130/131, pp.85-101, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『新撰和歌六帖』における『古今和歌六帖』出典未詳歌の受容と継承

福田智子

一 問題の所在

『古今和歌六帖』（以下、『古今六帖』）は、我が国初の類題和歌集で、平安中期、十世紀後半に成立したとされながら、現存する伝本は、江戸期のものがほとんどである。^(注1) もちろん、鎌倉期には伝本が何本もあったようである。『新編国歌大観』の底本に採用されている桂宮本には、次のような伝本を書写あるいは校合し終えたという本奥書がある。

- 「民部御本」 嘉禄二年（一二二六）春下旬（第一帖奥書）
- 「戸部御本」 嘉禄三年（一二二七）七月（第三帖奥書）
- 「入道右大弁本」「家長朝臣本」 寛喜二年（一二三〇）十二月十九日（同）

「民部御本」 嘉禄三年（一二二七）三月廿日（第四帖奥書）

だが、現時点ではそれらの本を直接確かめる術はない。「作歌の手引書を意図したもの」^(注2)とされ、また、『源氏物語』の引き歌の出典としても注目されるなど、^(注3)平安中期の作品を繙くにあたり重要な位置を占めると見られる『古今六帖』だが、このような伝本の現存状況なのはいったいなぜなのか。

この点を考えるとき、すぐに念頭に浮かぶのは、『新撰和歌六帖』（以下、『新撰六帖』）の存在である。『古今六帖』の歌題について、家良・為家・知家・信実・光俊という、当代を代表する歌人たちが、ひとり一首ずつ歌作したものである。「寛元二年（一二四四）六月からある程度の期間をおいた時期」^(注4)に成立したとされる。それは、先の『古今六帖』桂宮本

の本奥書に記される年代から、十数年後にあたる。

『新撰六帖』の伝本の現存数や後世への影響について、『新編国歌大観』新撰和歌六帖解題（安井久善氏）は、次のように述べている。

本作品の伝本の数が比較的多く、また夫木和歌抄には、その編者藤原長清の手によって、この六帖から実に八〇〇余首、すなわちこの作品の全歌数の約三分の一が採入されている点などからみると、中世末期以降、近世を通じて、この作品が甚だ重視されたらしい形跡を認めることができるのである。

すなわち、『夫木和歌抄』（以下『夫木抄』）への入集数も多く、中世から近世にかけての時期、そして近世以降も、「甚だ重視されたらしい」というのである。

そうすると、『古今六帖』はこの『新撰六帖』に「作歌の手引き書」としての役割を取って代わられたのではないか、という見方も成り立ちそうである。だとすると、そこには、六帖題和歌をめぐるどのような歌人たちの動きがあったのか。そして、時代が求めた和歌表現の受容と継承のあり方は、いかなるものであったのか。

それらの点を明らかにするために、本稿では、まず、『新撰六帖』の作者が、『古今六帖』の和歌表現をどのように取り入れているのかを考察してみたい。前述のとおり、『新撰六帖』は、『古今六帖』の歌題について歌作しているのだが、その際にはおそらく、『古今六帖』の歌題のみならず、和歌本文についても参考したであろうことは想像に難くない。ただし、『古今六帖』は類題和歌集、二次編纂の歌集であり、個々の和歌は基本的に出版を持っている。従って、『新撰六帖』の和歌表現の中に、『古今六帖』所収歌を念頭に置いたものが見出せたとしても、実際には、『古今六帖』の出版となった歌集そのものから発想した上での作歌かもしれない。その可能性を極力排除するために、以下の考察では、まず、『古今六帖』所収の出版未詳歌で、『新撰六帖』成立時までに成った歌集にも再録されていない歌に着目する。『新撰六帖』の作者にとつて、『古今六帖』にしか載っていない和歌の、その歌にしか見いだせない表現が、『新撰六帖』の和歌に用いられている例を見出し、考察の中心に据えるのである。以下、このような観点から、『新撰六帖』の和歌表現を、『古今六帖』出版未詳歌との関わりの中で見出していく。

二 同じ題の和歌を詠む

『古今六帖』を「作歌の手引き書」として利用するとき、最も単純には、『新撰六帖』は、これから詠もうとする『古今六帖』の歌題について、そこに列挙されている和歌の表現を参看して新たな和歌を詠む、という状況が想定される。まず、次の『新撰六帖』知家の歌を見よう。^(注10)

① 『古今六帖』第三帖、一七八六番「しほ」

なにはがたしほひしほみちつねなればおもひおもはずみ
えぬるものを

* 『新撰六帖』第三帖、一一〇三番「しほ」 知家

難波がた塩ひしほみちながれ木のうきてはしづむ身こそ
つられ

右は、いずれも「しほ」題の歌群中の一首である。『新撰六帖』知家歌の初句と第二句は、『古今六帖』と全く一致する。また、第四句「うきてはしづむ」という表現は、『古今六帖』の第四句「おもひ／おもはず」の対比から発想したものである。なお、『新撰六帖』は、『古今六帖』にはない語「な

がれ木」を第三句に置くが、後にこの和歌が『夫木抄』に収められる際には、「ながれ木」に分類されることになる。^(注11)
次も知家の歌である。

② 『古今六帖』第六帖、三八八九番「さねかづら」

なき名のみたつたの山のさねかづらくる人ありと誰かい
ふらん

* 『新撰六帖』第六帖、二一〇八番「さねかづら」 知家

おもふことおほえの山のさねかづらくるとあくとはなげ
きつつのみ

第二句から第四句にかけての「○○○の山のさねかづらくる……」という表現に着目したい。○○○の部分に「なき名のみ」立つ／龍田の山（古今六帖）、「おもふこと」多（し）／大江の山（新撰六帖）というように、地名を掛詞にして配置するといった点まで、知家の歌は『古今六帖』の和歌を意識して詠まれたと推察される。なお、結句「なげきつつのみ」の「のみ」は、『古今六帖』の初句「なき名のみ」に引かれたか。

後の『夫木抄』には『新撰六帖』の歌が収められ、また『歌枕名寄』には、『古今六帖』の歌は竜田篇の「山」題に、^(注12)『新

撰六帖』の方は丹波国「大江山」^(注12)題に、それぞれ収められた。

なお、「くるとあくどめかれぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらむ」(春上・四五・つらゆき・家にありける梅花のちりけるをよめる)という歌にあるが、その後の用例としてはそれほど多くはない。その『古今集』の歌を、『古今六帖』は、第六帖「むめ」題(四二二八番)に収める他、『定家八代抄』も採歌している点に注意しておきたい。また、『新撰六帖』自体にも他に二首、光俊歌(第六帖「はなかつみ」二〇二五番)と信実歌(同「まさき」二二六九番)に、この表現が見える。その信実にも、『古今六帖』を念頭に置いて詠まれたと思しき歌がある。

③ 『古今六帖』第六帖、三八二八番「ぬなは」

こりずまのこもりえにおふるうきぬなはうき身みに物を思ふ比かな

* 『新撰六帖』第六帖、二〇三九番「ぬなは」 信実

こもり江にしづみだにせぬうきぬなはくるしきこころいやかさぬらん

「こもりえ」と「うきぬなは」との組み合わせは、意外と他に

見当たらない。『古今六帖』が第三、四句を「うきぬなはうき身」と同音反復でつなぐのに対し、『新撰六帖』信実歌は、「うきぬなはくる(繰る/苦)しき」と縁語と掛詞を用いて新味を出そうとしているようである。なお、『歌枕名寄』は、「籠江」題の和歌として唯一、『古今六帖』歌を収めている。^(注13)

④ 『古今六帖』第五帖、三〇一三番「思ひわづらふ」

よのなかをおもひさだむるほどばかりわが心こころにもまかせたらなん

* 『新撰六帖』第五帖、一五八四番「おもひわづらふ」 信実
いなせともおもひさだめぬあふことをわが心こころにもまたぞまかせぬ

「男女の仲についてあれこれ考えて決めるときくらいは、私の気持ちに委ねてほしい」という、恋の相手への詠え望む心情を詠んだ『古今六帖』歌を踏まえ、信実は、逢わないとも逢うとも決心していない逢瀬なら、私の気持ちに委ねて逢ってくればよいものを、また逢ってくれないとは、という嘆きを、傍線部を和歌の骨組みにして詠んでいる。表現、発想ともに、両歌の関わりは緊密である。

もっとも、信実の初句「いなせとも」は、『後撰集』の「い

なせともいひはなたれずうき物は身を心ともせぬ世なりけり」
(恋五・九三七・伊勢・おやのまもりける女を、いなともせともいひはなてと申しければ)に拠る表現と見られる。また、同歌は『伊勢集』にも見出されるが、諸本間で初句に本文異同があり、正保版本歌仙家集一六番では「いなせとも」だが、西本願寺蔵三十六人集一七番では「いかにせん」になっている点には注意を要しよう。この伊勢の歌は、『源氏物語』の古注釈書においても『源氏釈』『奥入』から見えるが、『古今六帖』には収められていないことを付言しておく。

次に、家良の歌を見よう。

⑤ 『古今六帖』第六帖、三八五三番「わすれぐさ」

わすれぐさたねのかぎりにはてななん人の心にまかせざ
るべく

* 『新撰六帖』第六帖、二〇六一番「わすれ草」 家良

うきをいとふ人の心にまかせずはわするる草のたねやた
えまし

『新撰六帖』の家良歌、とくに傍線部からは、『伊勢物語』第二十一段の「今はとて忘るる草のたねをだに人の心にまかせずもがな」(三九番)が、すぐに想起されるであろう。この

『伊勢物語』の歌は、『古今六帖』には収められないが、『古今六帖』『新撰六帖』ともに、この『伊勢物語』の「人の心」に「忘れ草の種」を「蒔く」という語の組み合わせを共有しながら詠み継がれていると捉え得る。ここに、表現の系譜が見出されるのだが、やはり、恋人が自分を忘れないように、忘れ草の種はすべて無くなってしまつてほしい、という『古今六帖』歌があつてこそ、もうつらい思いをするのはいやだ、恋人を忘れたと思う人の心に蒔かせることで、忘れ草の種は尽きるのだ、という『新撰六帖』の発想が生きるだろう。

ところで、この『古今六帖』「わすれぐさ」題の歌(三八五三番)は、七首中七番目、最も末尾に位置しているが、家良が歌題の最末尾の歌に着目して詠んだ歌は他にもある。「かほどり」題の歌である。もつとも、その『古今六帖』の歌(四四八八番)は、出典未詳歌ではなく、後述するように『人麿集』に収められているが、ここでは特に取り上げてみたい。

⑥ 『古今六帖』第六、四四八八番「かほどり」

夕されば野べに鳴くてふかほどりのかほにみえつつわす
られなくに

* 『新撰六帖』第六帖、二六一六番「かほどり」 家良

夕さればまほにもみえぬかほどりの声もほのかにかすむ

野べかな

「かほどり（顔鳥）」がどのような鳥であるかは定かではないとされるが、夕方になると野辺に鳴く鳥で、その「顔」という名から「見ゆ」と組み合わせるといふ、和歌表現としての本意が、このような表現授受のあり方から醸成されていくのであろう。なお、『古今六帖』諸本において、初句「夕されば」が「春されば」になっている伝本が、わずかながら存在する。すなわち、内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本、神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本である。後者には「夕」という朱書き傍書があり、また、神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本では、本行本文「夕されは」の「夕」に右傍書「春」とある。また、『人麿集』において、「ゆふされは」が、書陵部本五〇一・四七（三七一番）、冷泉家本『詞林采葉抄人丸集』所収「人丸集」（六七番）に見えるのに対して、冷泉家時雨亭文庫蔵義空本は、「ハルサレハ」（五二九番）になっている。だが、少なくとも『新撰六帖』は、「夕されば」という本文で、この歌を享受していたと推察される。

さて、本論に戻ろう。「かほどり」題の歌は、『古今六帖』には三首、『新撰六帖』には五首が収められる。先に触れたとおり、「かほどり」題の歌においても、家良は、『古今六帖』

の同題末尾の歌に着目して作歌している。さらに、『新撰六帖』の家良の次に歌を配される為家は、「わすられぬそのおもかげはかほどりのこゑきくにだにねはなかれつつ」（二六一七番）という歌を詠んでおり、『古今六帖』のこの歌の結句「わすられなくに」を受けて、初句「わすられぬ」を詠み出したようにも見える。さすがにこれ以上の憶測は差し控えるが、『新撰六帖』の作歌に際し、『古今六帖』の歌を参看する度合いは、実際に『古今六帖』の表現を用いたか否かに関わらず、想像以上に大きいものだったのかもしれない。

ところで、『古今六帖』には、歌に詠まれる例の少ない、珍しい語を歌題とした箇所がある。先の「かほどり」もその一例であるが、そういう歌題について新たに歌を詠む場合は、自ずと『古今六帖』所収歌本文にも、より目配りする必要がある。次に挙げる『新撰六帖』の為家歌は、その類の作と見られる。

⑦ 『古今六帖』第五帖、三三六四番「ひとり」

たきものこのしたけぶりふすぶともわれひとりをばし
なすまじやは

* 『新撰六帖』第五帖、一七八七番「ひとり」 為家
たきものこのくゆるけぶりのしたむせびわれひとりとや身

をこがすらん

ともに薫物を薫く「火取り」と「一人」との掛詞を用いており、『古今六帖』の歌は「たきもの」「こ(籠)」「けぶり」「ふす(燻)ぶ」「ひとり」、『新撰六帖』でも「たきもの」「燻(くゆ)る」「けぶり」「したむせ(下咽)び」「ひとり」「こ(焦)がす」といった縁語仕立てになっている。「ひとり」を掛詞や縁語を用いて詠む際には、これ以上、工夫の余地はないといった詠みぶりである。『河海抄』は『古今六帖』歌を引用し、また、『夫木抄』は、「火取」題の和歌として、『古今六帖』の同題和歌二首と、『新撰六帖』の為家・知家・光俊の和歌各一首の計五首を列挙する^(注20)。

また、次の「山ちさ」は、『万葉集』に詠まれた植物である^(注21)が、それ以降の用例としては、『古今六帖』に三首収められるくらいで、和歌にはほとんど詠まれない。それゆえ、『古今六帖』の「山ちさ」題の最後、三首目の四三二四番に見られる「やまちさの花」と「しら雲」との組み合わせを、『新撰六帖』が同じく用いている点は、一見、ありふれているようだが、未だ他例が見いだせないものである^(注22)。

⑧『古今六帖』第六帖、四三二四番「山ちさ」

わがごとく人めまれらにおもふらししら雲ふかくやまち
さの花

*『新撰六帖』第六帖、二五二七番「やまちさ」為家
さくとだにたれかはしらんしらくものはれせぬ山のやま
ちさのはな

それでは、本節の最後に、『新撰六帖』の五人の作者のうち、最も若いと見られる光俊の歌を見よう。

⑨『古今六帖』第三帖、一六六一番「江」

いせのうみのをのみなどのながれえのながれてもみん
ひとのこころを

*『新撰六帖』第三帖、一〇四〇番「江」光俊
しほむかふをのみなどのながれえとなほこぎかねてと
まる伊勢舟

「ながれえ(流れ江)」自体、和歌に詠むには珍しい語であったようである^(注23)。その上、「をのみなどのながれえ」という表現はというと、『新編国歌大観』を検する限り、右の二首を見出すのみである。さらに視野を広げれば、後の薬師寺公義(元可入道)の「霜枯の蘆の落葉のなかれ江に数そふをの、湊舟

かな」(公義集・一八三・寒蘆^(注24))といった類例をわずかに拾うことはできるが、やはりありふれた表現というわけではない。『新撰六帖』の光俊歌が『古今六帖』を参看した跡を、ここに認めることができるだろう。なお、『新撰六帖』の作者のひとりである為家の単独撰に成る『統後撰集』に、この『古今六帖』の歌は、恋部に、「題しらず」「よみ人しらず」として採られている。^(注25)『新撰六帖』成立から間を置かない時期における為家の、この『古今六帖』の歌に対する評価が垣間見える。また、『夫木抄』『歌枕名寄』が、それぞれ『古今六帖』『新撰六帖』の歌を収めている点にも注意しておきたい。

次は、以前、拙稿^(注26)でも取り上げたことのある「うき」題の歌である。

⑩ 『古今六帖』第三帖、一六九〇番「うき」

あしのねのよわき心はうきことにまづをれふして根ぞな
がれける

* 『新撰六帖』第三帖、一〇五五番「うき」 光俊

うへ見えぬうきにおひたるあしのねのよわきころぞ身
をばしづめん

「うき(泥土)」題の歌は、『古今六帖』でも三首(一六八八)

一六九〇番)しかないが、『新撰六帖』のこの光俊歌は、その末尾の歌の表現を念頭に置いた作ということになる。その点では、先の家良の⑤⑥、為家の⑧の用例、とくに⑥や⑧の例が想起されよう。

さて、光俊の歌は、『古今六帖』の「あしのねのよわき心」という表現や、掛詞「うき(泥土/憂き)」をそのまま用い、それらの表現に、初句「うへ見えぬ」と結句「身をばしづめん」で、沈淪の情を付加するといった詠みぶりである。「あしのねのよわき心」という表現は、現時点では他例を見ず、また、『新編国歌大観』所収歌集の範囲内ではあるが、『夫木抄』他の後世の歌集への再録も確認していない。それだけに、『新撰六帖』作歌時の『古今六帖』歌本文参看を、より明示する例ということになる。

光俊には他にも、『古今六帖』の同題歌をもとに詠んだと考え得る『新撰六帖』歌がある。

⑪ 『古今六帖』第五帖、二七四四番「一夜へだつ」

なよたけにえださしかはすしのすすきよませにみえむ君
はたのまじ

* 『新撰六帖』第五帖、一四二〇番「一夜へだてたる」 光俊

山がつかきほにかこふわれ竹のよませになどてあひ見
そめけん

この「よませ（夜交ぜ）」という語が歌に詠まれるのも、きわめて稀であるが、光俊は、さらに「（なよ／われ）竹」の「節（よ）」から「夜（交ぜ）」を導き、『古今六帖』の「一晩おきに通つて来る人を当てにすまい」という意志に対し、「どうして一晩おきに逢い始めたのだろう」という後悔に転換している。

なお、『夫木抄』は、『古今六帖』歌を「薄」題（注28）に、また、『新撰六帖』歌を「われ竹」題（注29）に配する。『夫木抄』の「われ竹」題の歌は、『新撰六帖』の歌、ただ一首のみである。

三 異なる題の和歌を詠む

さて、ここまで『新撰六帖』が『古今六帖』の和歌本文を念頭に、同題の歌を詠んだと思われる例を列挙してきたが、やはり、歌を詠む際に参看する歌は、同題の歌のみとは限らない。先の『新撰六帖』一四二〇番の光俊歌も、視点を変えると、次の『古今六帖』の歌との表現の一致が浮かび上がってくる。

⑫ 『古今六帖』第四帖、二一七七番「ざふの思」

山がつかきほにかこふませがきのませたりきとも見え
しきみかな

* 『新撰六帖』第五帖、一四二〇番「一夜へだてたる」 光俊
山がつかきほにかこふわれ竹のよませになどてあひ見
そめけん

両歌は、初句と第二句が全く一致する。『新撰六帖』の歌の題は「一夜へだてたる」だが、ここで踏まえているのは『古今六帖』の「ざふの思」題の一首であった（注31）。そこに、『古今六帖』の歌本文にひとわり目を通し、歌題を越えて、その表現を作歌に生かそうという意志が窺える。なお、『新撰六帖』の歌は、前述のとおり、『夫木抄』に収められているが、『古今六帖』の方は、『夫木抄』に見えない。

次は、家良の歌を見てみよう。ここでは五首統けて考察する。

⑬ 『古今六帖』第二、一〇八九番「みち」

たまほこのみちのちまたにいままつとたちたるほどによ
は更けにけり

* 『新撰六帖』第五帖、一八〇六番「ふえ」 家良

玉ぼこのみちのちまたにふくふえのこころ^(注32)ばかりはゆかぬ^(注33)ものかは

「たまぼこのみちのちまたに」という表現は、『新撰六帖』の時代までは、未だ他例を見ないものである。『古今六帖』のように「みち」題であれば、詠まれそうな表現であるが、『新撰六帖』では、「ふえ」題の歌として詠まれている。「みち」は「ゆく」ものであるから、そこから「こころゆく」(満足する)という表現を発想し、道々、心ゆくまで笛を吹き歩く気持ちで詠んでいる。『夫木抄』は、この『新撰六帖』の歌を「笛」題に収める。^(注33)

なお、「みちのちまた」という表現ならば、『新撰六帖』第一帖「なごしのはらへ」題の歌にも、「ふけぬるかみちのちまたにみそぎしてぬさきりすつるむらのさと人」(一〇五番)という光俊の歌がある。和歌における稀な表現であるだけに、『古今六帖』一〇八九番歌の影響が示唆される^(注33)ところである。この光俊歌も、『夫木抄』に再録されている。

⑭ 『古今六帖』第二、一〇四八番「もり」きのらう女

山城のいはたのもりのははそはらいはねど秋は色づきにけり

* 『新撰六帖』第一帖、四〇一番「しぐれ」家良
はつしぐれひとにふればや山しろのいはたのもりはいろづきにけり

「山城のいはたのもり」は、『万葉集』に見える^(注34)が、「色づく」ことを詠んだ例は、『新編国歌大観』を検しても、これら二首のみである。『新撰六帖』の方は、後に『新後撰集』に採られ、さらにこれを出典として、『歌枕名寄』が採歌^(注35)している。

⑮ 『古今六帖』第三、一五八七番「かは」

大井川おろすいかだのいかなればながれてつねにこひしかるらん

* 『新撰六帖』第四帖、一二五一番「うらみ」家良
おほ井がはいかだのはすけいかばかりうきにつけても恋しかるらん

「大井川」の「いかだ」は、勅撰集においては『拾遺集』の「大井河くだすいかだのみなれぎを見なれぬ人もこひしかりけり」(恋一・六三九・よみ人しらず・題しらず)が初出であり、『古今六帖』歌もその系譜に加えられるであろうが、『新撰六帖』の結句「こひしかるらん」は、やはり『古今六帖』

歌から来るものとみてよいであろう。『古今六帖』の「いかだのいかなれば」という同音反復も、家良の「いかだの……い
かばかり」の発想のもとと捉えられよう。なお、この『古今
六帖』歌が初めて勅撰集に採られるのは、『新後拾遺集』^(注37)で、
十四世紀後半に入ってからのことである。

⑯ 『古今六帖』第五帖、二八八番「おどろかす」

あしひきの山だのひたのひたぶるにわするる人をおどろ
かすかな

* 『新撰六帖』第二帖、六四一番「あきの田」家良

足曳の山田にかくるひたぶるにあな物さびし秋の夕ぐれ
『古今六帖』歌では、第二句までが同音反復で「ひたぶるに」
を導く序詞で、歌題との整合性は結句「おどろかすかな」に
委ねられている。『新撰六帖』は、『古今六帖』の上句に詠ま
れた情景そのものを歌材として、「あきの田」題の歌に用い、
夕暮れの寂しさに焦点を合わせた内容にまとめられている。

⑰ 『古今六帖』第五帖、三四七九番「いろ」

としふれどいろもかはらぬ君をしもいかなるいろにおも
ひそめけん

* 『新撰六帖』第五帖、一八八六番「みどり」家良

としをへて色もかはらぬたかさごの松のみどりはたれか
そめけむ

「いろ」と「みどり」とは、歌題としては同じ部類に属するだ
ろうが、『古今六帖』の歌が、いつまで経っても自分になびい
てくれない恋の相手の頑なさ、そのような人をどうして恋
い慕うようになってしまったのかという恋の悩みを詠むのに
対し、『新撰六帖』は、常盤の高砂の松を寿ぐ。「とし（ふれ
ど／をへて）いろもかはらぬ……（おもひ／たれか）そめけ
ん」という一首の骨組みを取り入れながら、第三、四句を中
心に、全く異なる内容を詠み込むことで新たな和歌を詠むと
いう方法が見える。

以上は家良の歌であったが、ここで知家の歌にも目を向け
てみよう。

⑱ 『古今六帖』第二帖、九〇四番「山」

つこの国のいくたのやまのいくたびかわがいたづらにゆき
かへるらん

* 『新撰六帖』第二帖、七六八番「くに」知家

あまのすむさとをばかれずつの国のいくたびなみのたち

「つの国のいくた」から「いくたび」と続ける例は、『拾遺集』にある。「つのくにのいくたの池のいくたびかつらき心を我に見すらん」(恋四・八八四・よみ人しらず・題しらず)という歌で、『古今六帖』『新撰六帖』の歌を含めて、表現の系譜が見出される。その上で注目されるのが、『古今六帖』と『新撰六帖』における結句「ゆき／たち」かへるらん」の類似であろう。やはり『新撰六帖』の歌が、『古今六帖』歌を念頭に置いた詠である可能性を否定し去ることはできないだろう。『古今六帖』の歌は、後に『歌枕名寄』生田篇、「(生田)山」題に、唯一採られることになった。^(注38)

次は、知家の「かばざくら」題の歌である。

①9 『古今六帖』第五帖、三四〇六番「ふえ」

からたけのこちくのこゑもさかせなんあなうれしともおもひしるべく

* 『新撰六帖』第六帖、二三五八番「かばざくら」 知家
から竹のふえにまくてふ かばざくら はるおもしろくか
ぜぞふくなる

『古今六帖』題目録では、第六帖に「かばざくら」の名も見え
るが、本文では、「かばざくら」ではなく、「かにはざくら」
の題が存する。「かばざくら」は、あるいは「かにはざくら」
のことかとも考え得るが、ただ一首の「かにはざくら」題の
歌が、物名歌「かづけどもなみのなかにはざぐられで風ふく
ごとくにうきしづむ玉」(四二一六番)であることから、『古今
六帖』には「かばざくら」の歌は載っていないことになる。^(注39)

『新撰六帖』は、『古今六帖』の題目録に拠って題を設定した
と思しいが、そうすると、「かばざくら」の例歌は、少なくとも
も現在確認できる『古今六帖』諸本からは見出すことができ
ない。

そこで知家は、「からたけ(唐竹)」という、まず和歌には
詠まれない語を『古今六帖』「ふえ」題の歌に見出していたの
を、樺卷の笛を詠むことで、「かばざくら」の歌に充てたので
ある。ここで、作歌のための使用語彙として、『新撰六帖』
知家歌は『古今六帖』から「から竹」という語を継承したと
想定されるわけだが、樺卷の笛を詠むことも含めて、「から
竹」は、これ以後も歌語として定着しなかったようである。
なお、『夫木抄』は、「から竹」^(注40)題の歌として唯一、『新撰六
帖』のこの歌を挙げており、『古今六帖』の歌は載せていな
い。

次は、為家の歌である。

⑳ 『古今六帖』第五帖、三二五四番「はた」

さほひめのおりかけさらすうすはたのかすみたちきるは
るののべかな

* 『新撰六帖』第一帖、三八七番「はるさめ」 為家

さほひめのたつや霞のうすごろもしくしくぬらす春雨ぞ
ふる

春霞の情景を、春の女神である佐保姫の手になる布や衣に見立てることは、和歌表現として常套であるが、『古今六帖』の「うすはた」という語は、歌にはまず見られない。当該歌の他に、現時点で確認できる平安期の例は、「うすはたにおれる衣は夏きてもはるのかけつつをしまれしかな」（夫木抄・巻第三十三・雑部十五・一五五〇四・祐拳・衣／家集）が挙げられる程度である。^(注1) 為家は、「はるさめ」題の歌を詠むに際し、まず、『古今六帖』の「うすはたのかすみ」の立つ「はるののべ」を想起し、「うすはた」から「うすごろも」を発想したのではなかったか。実は、前掲『夫木抄』に載る祐拳の「うすはた」の歌がそうであったように、「うすごろも」の用例も、春から夏へという季節の移り変わり、どちらかといえれば夏の

到来に比重を置いて詠んでいるものが目に付く。たとえば、「たちのこるかすみのそでのうすごろもこれもやけふのならひなるらん」（明日香井和歌集《雅経》・八七九）は、「詠五十首」の中の「夏十」冒頭に位置する。そうすると、単に語句の組み合わせのみならず、「うすはた」「うすごろも」を詠みながら、春という季節に軸足を置くという点からも、為家が『古今六帖』の歌本文を特に意識していた可能性を指摘し得るであろう。なお、『夫木抄』は、『古今六帖』のこの「はた」題の和歌を「霞」題に収めている。^(注2)

最後に、信実の歌を挙げよう。

⑳ 『古今六帖』第五帖、二六四八番「いはでおもふ」

こころにはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふに
まされる

* 『新撰六帖』第五帖、一六一九番「わぎもこ」 信実

行くみづのわきはかへれど、わぎもこにいはでおもふと
しらせやはせん

この『古今六帖』の歌は、『紫明抄』『河海抄』といった『源氏物語』の古注釈書には引用されるが、^(注3) 歌学書類にはまず見出されないようである。「心の中で思っているほうが、口に出

して思うよりもつらい」という『古今六帖』の歌に対し、『新撰六帖』信実歌は、反語を用いて「口に出さずに心の中で激しく思っている、それを彼女に伝えたりはしない」と詠む。「いはでおもふ」つらさがあるからといって、相手に「しらせ」ることなどしない、という内容は、『古今六帖』歌に対する切り返しとも受け取れよう。このように、信実は、『古今六帖』の歌を踏まえながら、「わぎもこ」という語を加えて、『新撰六帖』の歌題に適うように一首を仕立てている。

四 まとめ

以上、『新撰六帖』の作者が『古今六帖』の歌題のみならず、その和歌本文をも参看して作歌したであろう形跡を、『古今六帖』の出典未詳歌を中心に考察してきた。その結果、『新撰六帖』の五人の作者、家良・為家・知家・信実・光俊は、程度こそ異なるようだが、それぞれの視点から、『古今六帖』の和歌本文を踏まえて作歌したらしいことが明らかになった。もちろん、本稿で取り上げた用例がすべてではあるまい。今後もし引き続き、『古今六帖』と『新撰六帖』との詳細な表現比較、さらには『新撰六帖』諸本の伝本レベルでの検討も必要であろう。

また、類題和歌集の基本的な使い方、すなわち、「作歌の手引き書」として『古今六帖』を参看する場合として、同題の歌を作ることが想定されるが、その際には、表現や内容の意識的な「ずらし」や「切り返し」が看取される。これは、当然といえば当然の作歌法であろう。

一方、『古今六帖』の歌題とは異なる歌題の和歌を詠む場合もある。これはすなわち、歌題を越えて、語彙や表現を利用することになる。そうすると、『新撰六帖』の作者は、『古今六帖』の和歌全体を、ある程度把握していたらしいことが想定される。これは、歌題ごとに表現を見る、元来の「作歌の手引き書」からの飛躍であり、藤原定家『詠歌大概』に言う『本歌取り』の心得(注5)に通底するものがある。本歌が認識されてこそその本歌取りであるが、『新撰六帖』のこのような歌作りは、『古今六帖』にしか載らないそれらの歌の表現を、当時の歌人たちに再認識させることにもなったであろう。(注6)

『古今六帖』が、すべての歌の作者を明記するわけではなく、また、古くから本文の乱れが指摘されていることは本稿冒頭で述べた。これに対し、『新撰六帖』は、明示された作者名に加え、整然とした構成を持っている。ここに来て、『古今六帖』は、「作歌の手引き書」としての役割を終え、代わって『新撰六帖』がその位置を占めたのではなかったか。『新撰六

帖』の五人の作者たちが、定家亡き後の鎌倉中期歌壇を支える実力者と目される歌人たちであったことも、その影響力の強さに拍車を掛けたであろうことは想像に難くない。

こうして『古今六帖』は、ひとつの役目に終止符を打ったとして、その後、にわかに注目されるのは十四世紀以降であろう。『夫木抄』『歌枕名寄』は、『古今六帖』をも、独自の視点から分類しようとする。『古今六帖』の享受のあり方が、実証的研究へと移行していき、その潮流は、江戸期の国学者による出典考証へと引き継がれていく。^(注4)『古今六帖』の伝本がほとんど江戸期のものであるという現象の原因の一端を、中世から近世にかけてのこのような六帖題和歌の享受のあり方に垣間見ること、あるいは可能なのではないかと思われるのである。

注

注1 『新編国歌大観』古今和歌六帖解題（橋本不美男氏・相馬万里子氏・小池一行氏）に拠る。

注2 注1に同じ。

注3 早くは亘理陸子氏「古今和歌六帖研究——撰取面における源氏物語引き歌との関係——」（『日本文学』第二〇巻、一九六三年三月）、近年では、藪葉子氏『源氏物語』引歌の生成——『古今和歌六帖』との関わりを中心に（笠間書院、二〇一七年四月）、田中智子氏『古今和歌六帖』第四帖《恋》から『源氏物

語』へ——〈面影〉項を中心に」（『新たな平安文学研究』青簡舎、二〇一九年十月）などがある。

注4 『新編国歌大観』新撰和歌六帖解題（安井久善氏）に拠る。

注5 なお、両者の歌題の対応を詳細に検討した佐藤恒雄氏「新撰六帖題和歌の成立について」（『香川大学教育学部研究報告』第一部第四十九号、一九八〇年三月。後に、『藤原為家研究』〈笠間書院、二〇〇八年九月〉所収。）には、『新撰和歌六帖題』は『古今和歌六帖題』に準拠しながらも、若干題を削除し、またかなりの題を追加していることが指摘されている。

注6 『新編国歌大観』所収歌集を網羅的に検するとともに、室城秀之氏著、和歌文学大系45『古今和歌六帖』（上）（明治書院、平成三十年五月）、同46『古今和歌六帖』（下）（同、令和二年十一月）の脚注、および『古今和歌六帖』（上）の出典追補一覧を参照した。

注7 『古今六帖』の出典未詳歌に着目して、その受容史を探るという視点は、近年においても、田口暢之氏「藤原重家の述懐歌——『古今和歌六帖』所収歌との関連——」（『和歌文学大系』月報56、第四六巻付録、令和二年十一月）に見られる。

注8 以下、和歌本文の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に依る。傍線・囲み線は筆者が付した。

注9 『夫木抄』巻第二十九、一三六七〇番。

注10 『夫木抄』巻第二十八、一三三八二番「繰」題。

注11 『歌枕名寄』巻第八、二四〇九番。

注12 『歌枕名寄』巻第三十、七六四三番。

注13 『定家八代抄』巻第一、春歌上、五九番。

注14 『歌枕名寄』巻第十五、四三三二番「須磨」題。ただし、結句を「おもはずもがな」とする。

注15 『新編私家集大成』に拠る。

注16 ちなみに、「うきをいとふ」という表現は、『新編国歌大観』を検する限り、『新撰六帖』以前には、『千載集』の「つらしともうらむるかたぞなかりけるうきをいとふは君ひとりかは」（恋五・九三一・祐盛法師・恋歌とてよめる）の一首を見出すのみである。

注17 『日本国語大辞典』（第二版）「かおどり」の項の補注は、「中古以後おおむね、「かおどり」の語義を、「かおばな」と同じく、容姿の美しい鳥と考えている」とし、雉の雄や鴛鴦などの諸説を列挙している。

注18 以上の本文異同は、各伝本の影印に拠る。

注19 『新編私家集大成』に拠る。

注20 『夫木抄』卷第三十二雑部十四、一五四二〜一五四五六番。なお、ここで取り上げた『古今六帖』三三六四番歌は、結句が「しらすべしやは」になっている。

注21 『万葉集』卷第七、一三六四（一三六〇）番、卷第十一、二四七三（二四六九）番。

注22 詳しくは、拙稿『古今六帖』出典未詳歌注積稿——第六帖（17）権々山萬草——（『社会科学』第四十八巻第二号、二〇一八年八月）を参照されたい。

注23 『日本国語大辞典』（第二版）でも、用例はまず『古今六帖』のこの和歌を挙げる。

注24 本文の引用は、『新編私家集大成』に拠る。

注25 『続後撰集』卷第十二、恋歌二、七三九番。

注26 『夫木抄』は、『古今六帖』一六六一番歌を、卷第二十五、雑部七、「をのみなと、伊勢」題、一一八九六番に、『新撰六帖』一〇四〇番歌を、卷第二十三、雑部五、「ながれえ、未国」題、

一〇六八四番に置く。また、『歌枕名寄』は、卷第十七伊勢海篇、「湊 付流江」題に、『古今六帖』『新撰六帖』の和歌をもにも収める（順に四七〇四・四七〇六番）。ただし、『古今六帖』歌の出典は『続後撰和歌集』とされる。

注27 『古今六帖』本文の変容と享受——伊勢の「雪中の筈」題の屏風歌をめぐって——（『文化情報学』第八巻第一号、二〇一二年十月）。

注28 『古今六帖』二七四四番歌は、素寂『紫明抄』にも載るが、第四句を「ひとよませなる」とする。

注29 『夫木抄』卷第十一、秋部二、四三二六番。

注30 『夫木抄』卷第二十八、雑部十、一三二五九番。

注31 『新撰六帖』にも、もちろん「さぶの思」という歌題があり、光俊は「おもはじと思ふにもにぬおもひこそおもふにたがふおもひなりけれ」という歌を詠んでいる。この光俊歌には、『古今六帖』同題所収の「おもへどもおもはずとのみいふなればいまはおもはじおもふかひなし」（二二二三番）、「われをおもふ人をおもはぬむくひにやわがおもふ人のわれをおもはぬ」（二二三番）といった歌が影響していると考えられそうであるが、いずれも『古今集』卷第十九の誹諧歌（一〇三九・一〇四一番）である。

注32 『夫木抄』卷第三十二、雑部十四、一五二二一番。第四句「ふくふえも」。

注33 『夫木抄』卷第九、夏部三、「荒和祓」題、三八二九番。

注34 『万葉集』卷第十二、二八六七（二八五六）番、卷第十三、三二五〇（三三三六）番。

注35 『新後撰集』卷第五、秋歌下、四二七七番。第二句「日ごとによれば」。

注 36 『歌枕名寄』 卷第一、山階篇、二八一―二八二番。

注 37 『新後拾遺集』 卷第十一恋歌一、九九五―九九六番。

注 38 『歌枕名寄』 卷第十五、四一四―四一五番。

注 39 佐藤恒雄氏注5論文によれば、『新撰六帖』の歌題は、『古今六帖』の物名として詠まれやすい題が除かれる傾向が見られるという。物名歌のような言語遊戯の和歌は、当時の好尚に合わなかったものと推察される。

注 40 『夫木抄』 卷第二十八、雑歌十、一三二―一三五番。

注 41 『祐拳』は、一条朝の歌人、平祐拳。詳しくは拙稿「平祐拳覚え書き」(『語文研究』第八十二号、平成八年十二月)、同「平祐拳の歌——一条朝和歌の側面——」(『和歌文学研究』第七十五号、平成九年十二月)を参照されたい。なお、いずれも後に、『平安中期私家集論——歌人・伝本・表現——』(勉誠出版、二〇〇七年二月)所収。

注 42 『新編国歌大観』所収歌集の範囲内では、その他、江戸期の歌が三例あるにとどまる。なお、『袖中抄』第十九、九七七番では、当該歌の第三句を「うつはたの」とする。この場合、語義未詳ながら、『令集解』神祇・孟夏条に見える「宇都波多」か。

注 43 『夫木抄』 卷第二部二、五四八番。

注 44 『源氏物語』横笛巻と東屋巻に一箇所ずつ引用されるが、『源氏物語』の引き歌としては、もっぱら下旬「いはで思ふぞいふにまされる」に依拠している。

注 45 「以」同事「詠」古歌之詞、「頗無」念歎「以」花詠「花」以「月詠」月。「以」四季歌「詠」恋・雑歌、「以」恋・雑歌「詠」四季歌、「如此之時無」取「古歌」之難「歎」。(『新編日本古典文学全集』歌論集)に拠る。

注 46 『新撰六帖』の後に編纂された『現存和歌六帖』では、歌題は

『古今六帖』に倣いながら、『古今六帖』の出典未詳歌との表現上の関わりは薄いようである。この点については、『現存和歌六帖』の編纂意図や当時の歌壇の状況を見据えながら、あらためて考察する必要があるだろう。

注 47 山本明清校注『古今和歌六帖標注』は、そのひとつの到達点であろう。

〔附記〕本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究(二〇一九―二〇二二年度)、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」(科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号20K12565、二〇二〇―二〇二三年度)の一部であり、冬の研究会(二〇二〇年十一月二十九日)にて行った研究発表の内容をまとめたものである。席上、高橋美都氏、藤島綾氏にご教示いただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

なお、用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「e-CSA Ver.200」を使用した。

(ふくだ ともこ・同志社大学文化情報学部教授)